

危機管理の失敗

ジャーナリスト 大津彬裕

人間がつくるものである以上、新聞に間違いがあるのは避けられない。その間違いが明らかになった際、すみやかに訂正しなければならないのは当然だ。間違いを訂正する場合、完全に間違っている場合は、記事を取り消し、あるいは削除する。

間違いは各方面に迷惑をかけるので、訂正には謝罪がつくのが通例だ。「おわびと訂正」はセットになっていて、おわびのない訂正は誠意がないように思われる。「おわびして訂正します」という言葉は、新聞の決まり文句になっているようだ。

今度の朝日バッシングの原因の一つになった池上彰さんのコラムは、朝日新聞社が自社の過去の慰安婦問題で、きっかけとなつた吉田清治証言は虚偽だと判断し、取り消すという検証記事に関するものだった。

「連載掲載見合わせ」になつてゐた池上さんのコラムは、朝日新聞に「池上さんや読者の皆様にご迷惑をおかけしたことをおわびします」という定石どおりの「おわび付き」で掲載された。

当然で常識的なこと

読んでみると、とりたてて朝日に対して厳しいわけではなく、ジャーナリスト、いや普通の読者なら誰にでも分かる当然で、常識的なことが書かれているに過ぎない。

ジャーナリストの原稿らしく、重要なことは一番前の第一パラグラフに書いてある。

「過ちがあったら、訂正するのが当然。でも遅きに失したのではないか。過ちがあれば、率直に認めること。でも、潔くないのではないか。過ちを訂正するなら、謝罪もるべきではないか」

訂正に謝罪の言葉がなかったからである。

「遅きに失した」というのは、虚偽証言が掲載されてから32年も経つてゐること。「潔くないのではないか」というのは、吉田証言は他紙も報じたと書いてゐるが、朝日の報道の過ちなのに、他社を引き合いに出すのは潔くないといふのである。

「危機管理」という言葉がある。会社が不祥事で危機に追い込まれた際の対処方である。今回の事件に対する朝日の対応を見ていると、やることなすことが危機管理の狙いである、社へのダメージの軽減より逆に、むしろ増大、炎上への道をたどつたように見える。

当然で、常識的なことさえ受け入れられないような雰囲気があつたのだろうか。

筆者紹介



大津彬裕（あおつ・よしひろ）

東京教育大学卒。昭和37年読売新聞社入社。社会部・外報部・解説部記者を経て、共同PR社顧問。元PRコンサルタント。慶應、玉川、相模女子大学非常勤講師を歴任。「ブランドは広告でつくれない」（翔泳社、共訳）など著訳書多数。